『太平広記』鬼部説話の構成 ―鬼十六～二十―

The ghost stories of "Taiping Guangji" vol.16 ～ vol.20

三田明弘
MITTA Akihiro

はじめに

本稿は、唐代までの中国鬼話の集大成である『太平広記』鬼部四十巻のうち、「巻三三一　鬼十六」から「巻三三五　鬼二十」までの鬼話を分析し、盛唐期の鬼話の特徴を解き明かすことを目指したものであり、論者の既発表論文「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼一～鬼十―」[1]及び「『太平広記』鬼部説話の構成―鬼十一～鬼十五―」[2]の続編である。

右の二本の論文において、「巻三一六　鬼一」から「巻三三〇　鬼十五」までの説話の分析を通して、鬼話の話型パターンを7種類に分類した。以下にそれを掲げる。

①冥婚譚　男が女の鬼と結婚するパターンが多く、女と男の鬼の例は少ない。跡継ぎの子を産む場合も有るが、夫婦は長く共に暮らすことはない。

②塚墓宿泊譚　一夜の宿を借りた家が、翌日見ると墓であったという話。冥婚譚にもよく見られる話型である。

③変鬼帰還譚　鬼となった家族や友人が帰ってくる話。死後の自分の身分・境遇、鬼ゆえに知り得る現世の人々の未来、冥界の秘密などを鬼が語る。仏教の影響が強まるにつれて追福を求めるパターンも増えてくる。再婚した配偶者への憎悪から鬼が出現し、かつての妻や夫に危害を加える例も多い。

④冥界召喚譚　冥界の吏である鬼が人を冥途に召喚する。命に従い冥途に赴く話もあるが、賄賂や身代わりなどの手段で死を免れようとする話が多い。

⑤鬼神遭遇譚　外や自宅（厠の例も多い）などで鬼に遭遇するという話型。逃げたり争ったりする展開の場合は、その場で取り殺されなくても、間もなく絶命する話が多い。鬼神に改葬や廟の修復を依頼されるというパターンも少なくない。

⑥凶宅鬧鬼譚　家に鬼が居着いて、家人を悩ませるという話型であり、初期の鬼話にも多くのバリエーションが見られる。その家の元の持ち主

であったり、外から来たり鬼の出自も様々であるが、振る舞いも騒霊現象程度から家人の命を奪う話まで多岐にわたる。食を盗む、食を求めるという要素が多くのに見られる。例は多くないが、家の人を助ける鬼の話もある。

⑦冥事占判譚　人の運命（冥事）を知ることが出来るということが鬼の大きな特徴の一つであるが、優れた道士などは、鬼と同じように冥事の情報にアクセスできる。そのような人間が、人の運命に関する情報を知り、予言したり運命を操作したりする話。

本稿では「巻三三一　鬼十六」から「巻三三五　鬼二十」までの全所収話のタイトルと概略を掲げ[3]、それらを右に挙げた7種の話型に分類した上で分析を行う。

一　黄金時代における凶兆としての鬼話
―巻三三一　鬼十六―（唐玄宗・開元～天宝）

巻三三一　鬼十六

薛矜　開元中、東西二市を管理していた薛矜は東市で車に乗った女に言い寄り、その邸宅を訪れたが、帳の内で向かい合った女は、顔は一尺余りで青く、声は犬のようで、薛矜は気を失い、回復するまで一月余りかかった。邸宅に見えたのは墓であった。

朱七娘　開元元年、洛陽の伎女朱七娘の元になじみの王将軍がやって来て、七娘を自宅に連れ帰った。翌朝、七娘は王を祀る祭壇に敷かれた布団で目覚めた。実は王は半年前に死んでいた。

李光遠　館陶の令李光遠は任地の旱害の惨状を強く訴える報告書を書き終えた後、急死した。報告書は県令から州司馬に届けられたが、州司馬は握りつぶし、人々は李光遠がいればこんなことにはならなかったと嘆いた。その夜、李光遠が人々の前に馬に乗って現れ、人々は司馬に李光遠と会うことを求めた。司馬は人を遣わして謝罪し、災害が認定された。

李霸　厳酷かつ清廉な岐陽の令李霸は妻子にも貧しい暮らしをさせていた。任期の終わる頃に頓死したが、弔問客も訪れず、妻の嘆きに応じて李霸は姿を現し、かつての部下たちを集めて殺し、家人が五束の絹を持ってきた者は生き返らせた。都の自宅へ棺を運ぶ旅にも同行し、都でも噂を聞いて会いに来た人々と話をしたが、あまりの客の多さに家族が辟易すると、巨大な頭で目の飛び出た恐ろしい姿を現して追い返し、その後、現れなくなった。

洛陽鬼兵　開元二十三年夏、帝が行幸していた洛陽で、空中を数千万騎の甲騎兵が通る怪があり、人々はパニックになった。天宝中には晋陽に鬼兵が現れ、銅や鉄を鳴らして追い払おうとした民は、しばらくして皆死んでしまった。

道徳里書生　洛陽道徳里の書生が日暮れに中橋で出会った高貴な美女の家に連れてゆかれて一夜を共にしたが、夜半に目覚めるとそこは岩屋で、目の前には膨張した女の死体があり、悪臭を放っていた。書生は香山寺の僧に家に送って貰ったが、数日を経ずに死んだ。

安宜坊書生　洛陽安宜坊の書生は、夜、鬼に負われて、塚の中で暮らす一家の元に連れて行かれ、鬼がその家の息子を攫うのを目撃した。鬼は冥界の命を奉じて子供を取りに行かねばならなかったが、それには生きている人の同行が必須であったので書生を誘ったのであった。

裴盛　義興の尉、裴盛は昼寝をしている時に鬼に魂だけが連れ出され、仏を祀っている家の子供を攫うのを手伝わされた。その後、魂が体に戻

され、目が覚めた。

楊溥　天宝五年、楊溥たちは伐採のために林に入り、雪になったので木のうろで一夜を過ごした。その際に土地の神に祈りを捧げたところ、神は、婚礼の供物を食べに行こうという他の神の誘いも断り、ひと晩中、大蛇から楊溥らを守ってくれた。

薛直　勝州都督の薛直は仏や鬼の存在を否定したために神の怒りを買い、空中から声がして、まもなく死ぬことが予言された。死んでしまった薛直は、鬼となって家に帰り、妻子に別れを告げた。

劉洪　節度使薛楚玉の部下の劉洪が次々と長官の死ぬ屯田に赴任することを志願したところ、屯官を殺していたのは輔国将軍という鬼であった。劉洪は輔国将軍を召喚しようとするが、逆に輔国将軍にその剛直と才能を込まれ、病死してしまった。輔国将軍の部下の鬼として、富貴の身となった劉洪は母を迎えに来て連れ去り、母も死んだ。

前巻に引き続き、玄宗によってもたらされた唐の最盛期を時代背景とする話群であるが、盛時を称える話は見られない。天宝の末に訪れる大崩壊の予兆としての不気味な話が多い。鬼となってはじめて民や家族のためになることが出来たり、鬼となって富貴を得るという説話の背景には、人間の無力さを嘆く厭世的な思想が看取される。

冥婚譚

冥婚譚の多くは女鬼と人間の男の交わりを描くが、「朱七娘」は男の方が鬼である点を特色とする。本話は変鬼帰還譚でもあるが、自らが鬼であることを明かしていない点が、他の変鬼帰還譚とは異なる。

「道徳里書生」は、女の遺体が腐乱膨張している様を描写しているが、鬼の本体である遺体の無惨な状態を描く話は少なく、本話の特徴である

と言える。九相図に通じる説話である。

変鬼帰還譚

「李光遠」「李霸」は、地方官が死後、鬼となったことによって、却って周囲に大きな影響力を発揮するようになるという話である。「李霸」は当時の官僚の給与の実情が窺われる点も注目される。

「薛直」「劉洪」はどちらも鬼神を軽んじたために自らも鬼とされてしまうという点では、鬼神遭遇譚としての側面がある。しかし、鬼となった主人公が家族のもとに現れ、自らの顛末を語るところに、鬼神を軽んずべきではないという説話の主題が込められている。特に「劉洪」は鬼となったことを、結果的には人でいるよりも良かったこととして肯定的に描いている点が注目される。

冥界召喚譚

「安宜坊書生」「裴盛」は、一般的な冥界召喚譚とは異なり、主人公が、冥吏に命じられて人を冥途に連れてゆく手助けをするという説話である。

鬼神遭遇譚

「薛矜」は、ほぼ冥婚譚と変わらない話型構造の説話であるが、女鬼がおぞましい姿を顕し情交には至らないので、鬼神遭遇譚に分類する。

「洛陽鬼兵」の事件が起きたのが開元二十三年（７３５）となっているのは、この年が楊貴妃が玄宗の息子である寿王李瑁の妃となった年であり、安史の乱による唐の崩壊の発端となった年という含意があると考えられる。

「楊溥」は、神の加護の説話である。夜、人がたまたま神同士の会話を聞いてしまうというモチーフは、鬼神遭遇譚においてしばしば見られる他、「男女の福分」等の運定め話系統の昔話などにも見られる。

二　偽りの時代の人の表裏を描く鬼話
―巻三三二　鬼十七―（唐玄宗・開元～天宝）

巻三三二　鬼十七

唐晅　開元中、唐晅は外遊中に衛南に残した妻の訃報に接し、数年後、衛南に帰り、妻の鬼と再会した。妻は、仏教の道理が正しいこと、仏道二教が同源であることなどを唐晅に教え、また幼くして亡くなり、妻の元で鬼として成長している娘と再会させた。その後、同衾し、夜が明けた後、妻は去って行った。

蕭正人　琅邪太守許誡言が幼かった頃、親戚たちと鬼神のことを話していた際、ある者が鬼などいないとうそぶくと、軒先に鬼が巨大な足を垂らして人々を恐れさせたが、蕭正人は動じず、足を抱えて鬼を捕まえようとし、鬼は逃げていった。その後、蕭の身に災いが起きることもなかった。

韋鎰　監察御史韋鎰は自ら降格を申し出でて虢州任司戸参軍となり、当地の道路敷設を提案担当し、数百の墳墓を平坦地とした。すると、韋鎰の妻が死に、初七日の法事の後に韋鎰は亡妻の鬼と会って話し、役所に着いたところで自身も倒れて死んだ。人々は墓を壊した祟りであると言った。

趙夏日　寧王に仕えていた趙夏日は文章の名手として知られていた。死んだ後もその魂魄が生前と同じように家の仕事を取り仕切っていたが、三年経つと、第二子を通じて遺言を伝え、いなくなった。

茹子顔　京兆府博士茹子顔は、貧しい相婿の張虚儀が外地に任官する際、頼まれて借金の保証人になってやった。二ヶ月後、赴任先で死んだ張虚儀の鬼が現れ、迷惑をかけることを詫び、茹子顔は借金を返済してやった。張虚儀の鬼は再び現れて恩を謝し、それから数十日を経て茹子顔は死んだ。

劉子貢　病死した劉子貢は、生前の知人たちが地獄で罪人として苦しみ、同光王が生まれるというので七日だけ休ませて貰っているのを見た。蘇生して、そのことを語り、七日後に再び死んだ。

劉平　咸通年間、五経博士の盧斐は自らが神仙補養の術を身につけた隋代の人間であると称していた。安史の乱の際は終南山に隠れていた。盧斐が親しくしていた処士劉平善は、天宝年間、范陽の安禄山に招聘され、常に数十の鬼が安禄山に仕えているのを見て、傑物であると思った。しかし、それらの鬼が、龍に乗った葉法善の使役する二人の青衣童子に駆逐されたので、安禄山を助けていたのは邪な鬼であり、安禄山は終わりを全うしないことが分かり、逃げて華山に隠れた。

蕭穎士　揚子江を渡る船中で、二人の若者が蕭穎士を見て、鄱陽忠烈王に似ていると言った。蕭穎士が忠烈王の曾孫であることを告げると、二人は忠烈王の古い知り合いだと言ったので、蕭穎士は二人を神仙だと思ったが、墓泥棒が捕まった際、その中にこの二人もいた。二人は忠烈王の墓を盗掘した時に、その遺体を見ており、蕭穎士が忠烈王に似ていると気づいたのであった。

本巻は、祟られる能吏、債務を押しつけてしまい謝罪する鬼、死後に地獄で苦しむ人々、偽物の神仙、そして偽りの英雄安禄山など、表面の立派さとは異なる実態の人の話が多い。崩壊前夜の繁栄という時代そのものが虚偽に満ちていたとも言える。

冥婚譚

「唐晅」は、鬼となった妻と現世で再会する話で、妻から冥界の真実

を教えて貰うという変鬼帰還譚としての特徴を備えた説話である。しかし、本話の最大の特徴は、愛妻との一夜限りの再会を情感豊かに描き出す文芸性の高さであり、冥婚譚に分類した。明清の人間的な鬼を描く鬼話へと繋がる系譜上に位置する一篇である。

変鬼帰還譚

「韋鎰」は本質的には墓場を破壊したために祟りを受けた話であるが、先に死んだ妻が韋鎰の前に現れて話をした後に韋鎰が死んだことは、妻が韋鎰に彼ら夫婦が祟られたことを説明して韋鎰を鬼の世界へ連れて行ったと考えられるので、変鬼帰還譚に分類した。

「趙夏日」「茹子顔」は、自らの死後の身辺整理を鬼となって行う話である。

冥界召喚譚

「劉子貢」は、蘇生者が地獄での見聞を帰ってきて語るという冥界召喚譚の典型話である。同光王については未詳。

凶宅鬧鬼譚

「蕭正人」には、鬼を信じない者の前に鬼が現れる、鬼を見ても動じない人間には鬼は勝てない、という鬼話に頻出する二つのプロットが見られる。

冥事占判譚

「劉平」の冒頭に出てくる咸通は唐の懿宗の時代の年号であり、玄宗の死から百年程後の頃である。安禄山に取り憑いていた邪鬼を追い払った葉法善は、玄宗期の著名な道士で、妖怪退治の逸話が多い。開元中に卒しているが、神仙の如き存在であるので、天宝期の話に登場することを矛盾と考える必要は無い。

「蕭穎士」は、蕭穎士を忠烈王の子孫と言い当てて神仙と目された人物が、実は盗掘者に過ぎなかったという話。盗掘者が墓室で忠烈王の遺体を見ているので、鬼話と見なされたか。

三　人間的な鬼の説話
―巻三三三　鬼十八（唐玄宗・開元～天宝）

巻三三三　鬼十八

黎陽客　天宝年間、貧しい読書人が職を求めて黎陽に行く途中、日暮れに泊めて貰った屋敷でもてなしを受けた。実は館の主人は後漢の荀淑の鬼であり、男は添い寝をした下女から荀淑が河公の主簿となっている事を聞き、また荀淑が黎陽令を拘束し鳥に目をえぐらせて責め苦しめているのを見た。それは、黎陽令が狩を行い、獣が塀の中に入ってくるのを怒ってのことであった。翌日、屋敷のあった場所は墳墓となっており、黎陽に行くと、果たして黎陽の県令は眼病を患っていた。男が病気を治すと称して県令に面会して事情を話すと、県令は荀淑の墳墓を焼いて別の場所に移してしまった。すると目が治り、男に墓を焼いた事は告げずに褒美を与えた。ひどい火傷をしてぼろをまとった荀淑が男の前に現れて顛末を話し、男は恥じて悔やみ、酒を供え、自分の服を焼いて鬼に与えた。

李廻秀　尚書の李廻秀と交際のあった清禅寺の僧霊貞は、李廻秀の死から数年後、冥界に召喚された。すぐに召喚は誤りであったと分かり、現世に戻されることになったが、道案内の者が北の府城に誘導し、霊貞は将軍となっていた李廻秀に謁見した。李廻秀は子孫による祭祀が途絶えようとしていることを嘆き、霊貞は蘇生した後、遺族らに李廻秀の言葉を伝えた。それで諸子らは供養を行ったが、李斉損は霊貞は故人を中傷

していると怒った。その後、李斉損は権梁山らと謀反して誅せられ、兄弟は流竄し、李廻秀の子孫は絶えた。

琅邪人　琅邪の人が任城に行く途中、日が暮れて城外の家に泊めて貰い、その家の主人に歓待されたが、梨を剥くために客が犀角の柄の小刀を取り出すと、主人は顔色が変わり、死んでしまった。周りを見るとそこは塚の中で、果物皿に盛ってあったのは木の葉であった。客は塚から這い出て、人に尋ねたが、この塚のことを知っている人はいなかった。

崔咸　博陵の崔咸の書斎に、夜、雷雨の後に年十六七ばかりの娘が垣を越えて入ってきた。どこから来たのかも言わないので逃亡してきた者かと思って匿っていたが、娘は夜明けに死んでしまった。怖くなって女の家を占うために出かけた崔咸は、死んで三日になる娘が、昨夜、雷に打たれて動き出し、どこかへ行ってしまったのを探しているという下女たちと出会った。崔が女たちに遺体を見せると当人であったが、遺体は重く、動かすことが出来なかった。崔咸が酒を備えて祈祷すると、ようやく連れ帰ることができた。天宝元年六月のことであった。

季攸　天宝の初め、会稽の主簿季攸は、実の娘二人の他に親を亡くした姪を養っていたが、実の娘のみ嫁に行かせ、姪の結婚は世話をしなかったので、姪は恨みながら死んだ。その後、金持ちの子息で容貌の美しい楊という胥吏がいなくなり、季攸の姪の殯室で姪と共に棺の中で寝ているのが発見された。そして姪の鬼が季攸に、神が自分を楊に与えたので同衾したこと、楊を婿として翌月一日に婚儀の体裁を整えてほしいこと等を述べた。一日になり、姪の鬼が「楊郎を婿に迎える」と言うと楊は死に、姪と合葬された。

武徳県田叟　武徳県の酒封村の翁が、日暮れ時に娘の嫁入り先の礼事に出かけた際、二人の見知らぬ男が道連れになり、どこまでもついて来るので翁と口論になり、たまたま通りかかった隣家の息子が言い聞かせて二人は去って行った。隣家の息子が家に帰ってまもなく、翁の息子が、翁が帰らず乗っていた驢馬だけが戻ってきたというので、二人が翁が口論していた場所に行ってみると、溝の中で翁が死んでいた。衣服もそのままで傷もなかったので、鬼に取り殺されたのだと分かった。

裴徽　河南令裴回の甥の裴徽は、村のそばで美女を見かけ、誘いをかけてみたところ、女の立派な屋敷に招かれた。裴徽は部屋の奥に美しい帳や錦の布団がしつらえられているのを見て喜んだが、厠に行くと佩いていた魔除けの古剣が輝き、人も建物も消え、自身は草むらの墓の上にいた。

李陶　李陶が部屋で寝ていると鬼の美女がやってきて深い仲となったが、母に跡継ぎの妻が鬼で良いのかと泣きながらたしなめられ、会うのを止めた。それから李陶は科挙の受験のため都に行ったが、重病になってしまった。鬼の女は見舞いに行こうとしたが潼関で鬼の関守に阻まれてしまい、ちょうど李陶のいとこがやはり科挙のために都に行くのについて行き、関所を越えた。鬼の女の看病で李陶は回復し、任官することになったが、鬼の女は縁が尽きたと別れを告げ、去って行った。

長洲陸氏女　長洲の貧しい県丞陸某の十五、六歳の娘は、家族が虎丘寺に遊びに行った際、出かける服がないので家に残り、我が身をはかなんで井戸に身を投げて自殺した。鬼となった娘は殯屋の近くを通った者を中に引き込み、臨頓の李十八から求婚されたので結婚させてくれるよう父に伝言することを頼んだ。殯屋の中にいるのを発見された男は陸某に娘の言葉を伝え、陸某が臨頓に人を遣って調べさせると確かに李十八という人物がいたが、元気なので、陸某ははじめは信用しなかった。しかし数日すると李十八は病気となり、やがて死んだ。それで娘と李十八の

冥婚を執り行った。

刁緬　宣城の太守刁緬が玉門に軍使として赴いていた間に、宣城の庁舎の馬小屋に大猪のようで全身に目のある厠神が出現し、厠や役所をうろついた。帰ってきた刁緬が福を授けてくれるよう祈ると厠神は消え、それより刁緬は出世し、富貴の身となった。

王無有　楚丘の主簿王無有の娶ったばかりの妻は嫉妬深く、病気になった無有が厠に行くのを侍女に手伝って貰おうとするのも許さなかった。無有が厠にゆくと怪物が穴から手を伸ばして靴を欲しがり、無有の片方の靴を食った。無有が妻を責めて共に厠に行くと、また怪物が現れて、もう片方の靴も奪われ、食われてしまった。その後、別の日に怪物が「靴を返す」と言って、靴を投げよこした。靴は元のままであった。巫女にお祓いをしてもらうと、鬼が現れ、巫女に「王主簿の禄は尽きた。余命は百日である。早く帰らねば、ここで死ぬことになる」と言い、無有は故郷に帰り、予言された日に死んだ。

王昇　朝、従兄弟の陸望に会いに行った王昇は死んだ村人の家で厠を両手で押さえている怪物に見られて、恐れて逃げ、そのことを陸望に語った。陸望は「厠神に会った人はすぐには死なない」と聞いていると言って励ましたが、王昇はひどく気分が悪くなり、死んだ。

高生　天宝中、渤海の高生は病気で胸が痛み、医者に鬼が胸の中にいるので薬を飲むように言われて、薬を煮て飲むと、一斗余りのよだれを吐いた。よだれの中に塊があり、それを刀で割くと中に小人がいて、たちまち大きくなって逃げていった。

本巻では、鬼の描写において、その超常性よりも人間的な感情や内面を描く説話が多く見られるようになった点が注目される。その一方で、全く物を言わない、不気味で神秘的な鬼や、厠神や人体に潜み胸の病を引き起こす鬼などの特殊な鬼の話も含む。

冥婚譚

「崔咸」では、娘の鬼は物も言わず、両者の間に関係が生じたかどうかも定かでないが、遺体が動かなかったのは、死んだ娘の結婚への願望の表れである。「季攸」においては、生前に結婚できなかった娘の恨みがより明確に描かれている。また「長洲陸氏女」でも、鬼となっても正式な手順により結婚をしようとする娘が描かれている。しかし、人間の側から見れば鬼に魅入られることは歓迎すべき事では無く、「裴徽」では魔除けの古剣が鬼を祓い、「李陶」では李陶は鬼と関係し続けていることを母に非難される。ただ「李陶」の女鬼は代償を求めない献身を示し、後世『聊斎志異』に特徴的に見られる人間よりも純粋な心を持つ鬼の祖型の一つとなっている。

塚墓宿泊譚

鬼が塚を荒らした人間に祟るというのは鬼話の類型的展開であるが、「黎陽客」は、祟られた人間が力ずくで鬼に逆襲するという点が特殊である。

「琅邪人」において犀角の柄の小刀が鬼の見せる幻影を打ち消す威力を発揮しているのは、「裴徽」における古剣と共通している。

冥界召喚譚

「李廻秀」において、霊貞が冥界に誤って召喚されたのは、李廻秀が仕組んだことであろう。しかし、それでも李廻秀の危惧した運命は変えられず、その一族が途絶えてしまったことに本話の主題はある。権梁山の謀反は開元十年（７２２）に起きた出来事であり、連座した李斉損は李廻秀の息子である。李廻秀は唐初期の功臣である名将李大亮の族孫であるが、自身は則天武后の佞臣張易之に阿った人物として歴史上の評価

は芳しくない。本話の背後には、李廻秀への批判があると考えられる。

鬼神遭遇譚

「武徳県田叟」において、二人の鬼が田叟について行くことに固執したのは、この二人は自らを供養してくれる人のいない野鬼で、田叟が参加する礼事の供物で飢えを満たそうと目論んでいたのであろう。その当が外れて、怒りにまかせて殺害に及んだ、と解釈できる。鬼神が誘い合って婚礼の供物を食べに行こうとする描写は「楊溥」（巻三三一　鬼十六）にも見られる。

「刁緬」「王昇」はどちらも厠神に遭遇した話であるが、「刁緬」では福の神として、「王昇」では、死の予兆として描かれている。

「高生」は病気の原因である異物が口から出てくるという、『聊斎志異』巻五「酒虫」と同趣向の説話である。

凶宅鬧鬼譚

「王無有」は、「刁緬」「王昇」と同じく厠神の説話であるが、死を預言する神としての特徴が「王昇」より明確に描かれている。

四　冥婚譚から人鬼恋愛譚へ

―巻三三四　鬼十九―（唐玄宗・天宝年間）

巻三三四　鬼十九

楊準　楊準は郊外で出会った女を誘って野合し、以来、女が通ってくるようになった。女は楊準を自らの家に連れて行こうとし、楊準は断ると胸に激痛が走り、女に許しを請うて、その家について行き、女が鬼であることを知った。いつも楊準が去ると女は横になり、六、七日経つと又起きるのであった。そうして二、三年が過ぎたが、兄に科挙も受けずに、鬼の連れ合いとなっていることをたしなめられ、恥じて出家すると、鬼は来なくなった。その後、還俗して県尉となり、結婚もしたが、一年後に鬼の女が役所にやって来て、今度は許さないと言って、命乞いをする楊準を打ち、楊準は病気になって死んだ。

王乙　臨汝郡李氏荘の王乙は寄り合いに出かけた際に見かけた十五、六の娘と逢い引きの約束をし、村の家に宿を借り、夜、娘と会った。去り際に、娘は、家を出るときに馬鍬で怪我をしてしまったので、自分はまもなく死ぬであろうと言った。後日、王乙は任官し、赴任する途次、娘がすでに死んだことを聞き、殯屋で娘を弔うと、娘が現れ、王乙は地に伏して死に、その魂魄が娘と共に殯屋に入るのを侍女が見た。王家と娘の家は二人の冥婚を執り行った。

韋栗　新淦の丞の韋栗は、十代の娘がいた。赴任する途中、揚州で娘に漆塗りの手鏡をせがまれたが、後日買ってやると約束して、そのときは買わなかった。一年余りして娘は死に、遺体を故郷に運ぶ途中、揚州に船が停泊すると、娘の鬼が手鏡を買いに出かけた。娘に鏡を売った若い男は、娘も自分に気があるようなので下心を起こし、人に娘の後をつけさせたが、娘の払った代金が紙銭に変じていたので、韋栗に訴えた。韋栗が棺を開くと中に鏡があり、また供物の紙銭も代金分が無くなっていたのでみな悲嘆し、若者は金を回収する気は失せ、自分の気持ちを打ち明け、さらに銭一万を贈って娘の供養をした。

河間劉別駕　河間の劉別駕は、世間に自分の心に適う女はいないといつも言っていたが、西京の通化門で見た車に乗った美女に心を奪われ、資聖寺の奥にある女の家を訪れ、引き留められるまま何日も居続け、楽しんだ。ただ、夜がとても寒く、何枚も布団を重ねているのに体が暖まらないのを不審に思った。ある朝、目を覚ますと、女も家も無く、自身は

荒廃した園の落ち葉に埋もれて寝ていた。これより劉は長く患うこととなった。

王玄之　高密の美青年王玄之は蘄春の丞であったが、任期が終わり、故郷に帰っていた。夜になると、よく家の前を通って城内に行く十八、九の美人がいる気づき、声をかけて懇ろになり、女が通ってくるようになった。しかし、女は、亡兄の娘と同居していると言って、王には自分の家に来させなかった。女は裁縫に長けており、王の衣服は全て女が仕立てたが、その服を見た人はみな感心した。一年が過ぎて、ある夜、女は泣きながら、自分が以前の高密令の娘で、一度他所に嫁いだが出戻った後に病死した鬼であることを明かし、遺体が葬儀のために故郷に戻されるのでもう会えなくなると言った。翌日、女の家人がやって来た。王は女のことを話し、女が同居していると言っていた兄の娘もすでに死んでおり、共に殯屋に安置されていたことを知った。女がいなくなった後も、王は女のことを考える度に寝食を忘れた。

鄭徳楙　滎陽の鄭徳楙は、一人で馬に乗っていた時に、突然、崔夫人という人から娘婿に迎えられ、断ったものの屋敷に連れて行かれ、婚礼を行うことになってしまったが、十四、五の花嫁が見たことのないくらい美しかったので、鄭は喜んだ。しかし、翌日、新妻から彼らが鬼であることを聞き、崔夫人に家に帰ることを申し出、妻と泣きながら分かれた。崔夫人は三年後に迎えを寄越すと言った。家に帰るとすでに一年が過ぎており、崔夫人の館のあった場所は、夫人と息子の墓であった。館の生い茂っていた木々も実際には枯れていた。鄭は自らの余命が三年であることを悟り、三年後に崔夫人の迎えが来た時、「生死は定めがある。安楽の地に行くので憂いは無い」と言い、家の者に後のことを託して、その翌日に死んだ。

朱敖　杭州別駕であった朱敖は河南の少室山に隠棲していたが、天宝の初めに、陽翟県尉の李舒に嶽寺に招かれて向かう途中、緑袍を着た十五、六才の美しい娘が少姨廟に入るのを追って自らも廟に入ると、廟の壁に描かれた絵の中にその娘がいた。嶽寺で李舒らにそのことを話すと、皆驚いた。その晩から、朱敖の夢に件の娘が現れるようになり、朱敖は喜んだが、夜ごとに精気が失われていった。嵩嶽の道士呉筠はこの娘を追い払うことができず、朱敖が清浄な道士程谷神の部屋に泊めて貰うと、娘の姿をした神は現れなくなった。

　その後、朱敖が渭南県令の陳察微と程谷神の元を再び訪れての帰り、嵩岳に黒雲が湧き、雷が鳴り、驟雨の降る中、朱敖が陳察微の従者の一人と林に伏していると、不思議な光があり、数十人の天女がその中で舞い、観世音らの諸神もいた。半日ばかりして曲が終わると、周囲は暗くなり、皆いなくなった。朱敖らは夜中になってようやく家に帰り着くことができた。

裴虬　蘇州の陸去奢の屋敷はもとは宋の散騎であった戴顒の宅であった。天宝の末、河東の裴虬は、よくこの館に宿泊していた。ある時、急死して戴顒に召し出され、娘婿になるように言われたが、既婚であり、役職もある身であると固辞して、解放され、生き返ることができた。

趙佐　天宝の末、国子監の四門生に属していた趙佐はよく病気で寝込んでいたが、ある時、黄色い服の小吏に温泉宮観風楼の西の建物に連行された。そこには始皇帝がおり、当代の君主が始皇の宮の側に宮殿を建て歌舞音曲に明け暮れ贅沢を極めていることを褒め、趙佐に人間世界のことをあれこれと尋ねた。そして、間もなく大乱が起きるから都を離れるように警告すると、趙佐を送り返してくれた。

岐州佐史　岐州の佐史が都に来ていた際に、二人の冥吏と一人の頭の無

い者に拘引されそうになったが、紙銭一万枚で救ってくれるように頼み、免れることが出来た。

本巻は、情を通じ合わせた人と鬼の間の心理を細やかに描写する、従来よりも文芸的完成度の高い冥婚譚が多く見られるのが特徴である。

冥婚譚

「楊準」「王乙」「河間劉別駕」は、放恣な男女の交情を描き、主人公たちはその結果として懲罰的に死や長患いに至る。これらは、鬼話が反礼教な男女の交歓（野合）を生々しく描くことの可能な文学ジャンルとして、その表現技巧が深められていったことを確認し得る作品として評価できる。「王玄之」は、人鬼の間の情愛を細やかに描き、別離の描写も余韻があり、文学性が高い。「鄭徳楙」は、野合ではなく婿入りというクラシックな冥婚譚であるが、「王玄之」同様、情愛の描写に優れ、鄭徳楙が従容として鬼の世界に赴く結末に至る。これらの文学的成熟度の高い鬼話の出現が、後世の『聊斎志異』の誕生に繋がる。

「朱敖」において、朱敖の夢に現れた女は、少姨廟に祀られていた神であったことが本文中に暗示されている。説話後半の天女の舞の話は、吉野で大海人皇子（天武天皇）の前に天女が現れて舞ったという、日本の五節の舞の紀源説話に似る。本話において神を追い払うことが出来なかった吳筠は、玄宗の側近の道士であったが安史の乱の起きる少し前に隠棲した人物であり、その俗臭を批判している説話とも読める。

「裴虬」は裴虬が戴顒の娘婿になるのを断った話である。裴虬は杜甫とも交流のあった人物で、天宝中は永嘉尉で、後に諫議大夫になった。戴顒は戴逵（戴安道）の子で南朝宋期の高名な隠遁者の一人。本話は、戴顒が認めるほどの人物であったとして、裴虬を称える説話でもある。

冥界召喚譚

「岐州佐史」は、冥官に賄賂を使い、死を免れるという類型的な話であるが、従来の類話が鬼の方から賄賂を要求するのに対して、本話では佐史が交渉を主導しているのが新しい点である。

鬼神遭遇譚

「韋栗」は冥婚譚に発展する可能性もあったプロットの説話である。市で使われた鬼の金が紙銭になるというのは、「楊元英」（巻三三〇　鬼十五）にも見られる。

「趙佐」は、冥界召喚譚的展開であるが、趙佐が連行されたのは冥界ではなく、始皇帝が玄宗の歌舞音曲を眺めるために現世に建てた高殿であり、始皇帝が堕落した玄宗を褒める点に、当時の始皇帝に対するイメージの一側面として「自らの欲望に溺れ、国家を滅亡に追いやった君主」というものがあった事が窺える。温泉宮は現在では史跡「華清池」となっており、始皇帝陵や兵馬俑が付近にある。

五　亡国の宰相たち
―巻三三五　鬼二十―（唐玄宗・天宝～粛宗・至徳）

巻第三三五　鬼二十

浚儀王氏　浚儀の王氏の母の葬儀の際、娘婿の裴郎が酔って墳墓の中で寝てしまったが、皆気付かずに入り口を塞いでしまった。裴郎が目を覚ますと、そこは立派な屋敷で、王家の故人の鬼たちが集まっていた。裴郎を殺そうとする者もいたが、岳母の取りなしで救われ、宴席で踊らされる等して数日を過ごした後、救出された。

章仇兼瓊　剣南節度使の章仇兼瓊は、予言者の張夜叉に上京すると寿命

を減らすことになると警告されたが、都に向かい、漢州の駅で落馬して死んだ。心臓がまだ温かかったので彭州刺史李先は洛陽尉馬某に薬酒を届けさせたが、馬某もまた頓死してしまった。すると、章仇兼瓊が蘇り、馬尉のお陰で助かったと言った。馬某の鬼は家族に、章仇兼瓊の身代わにされてしまったことを語り、章仇兼瓊は自ら銭五百万を遺族に送り、又、彭州にも銭五百万を送るよう命じた。

李林甫　李林甫は長く宰相の座にあって、多くの人の恨みを買っていることを自覚し、鬼の災いを避ける方法を術師に相談し、その助言に従い、弓の名手趙翼を護衛に雇った。その後、李林甫の自宅での宴会で参加者がみな動けなくなってしまう怪事があり、趙翼が不審者を射ると、相手は袋をおいて逃げた。袋の中には李林甫や家来の名を書いた札が入っており、名を呼ぶとみな返事をして元に戻っていった。翌日、術士がやってきて、これは恨みを持ったまま死んだ者の仕業である、李林甫の罪はあまりにも多く、これ以降の十年のことは自分には助けられないと言った。李林甫が死んだのはそれから十年後であった。

陳希烈　宰相陳希烈の家に鬼が住み着き、詩を詠んだり歌を歌ったりして、家の者が何者かを尋ねると、遊び終わったら去ると答えた。服や食べ物も欲しがり、与えないと罵った。数日して、経史について語りだし、非常に博識なので、陳希烈の姪婿である司直の季履済と話をさせると、「諭されて目が開きました」と言っていなくなった。

楊国忠　天宝年間、楊国忠が権勢を振るっていた時、強引に面会した婦人が、面前で楊国忠の悪政を罵り、怒った楊国忠が斬ろうとすると姿を消し、再び現れるや「高祖・太宗の国が一人の匹夫のために転覆するのが残念だ」と言い、さかんに「胡（なんぞ）」という語を使って話し、笑って去って行った。その後、胡人の安禄山が挙兵し、人々はこの時の「胡」の意味を悟った。

李叔霽　安史の乱の際、李叔霽が妻と武漢から襄陽に逃げる途中、妻と二人の子が死んだ。李叔霽の妻の洛陽の叔母は、安禄山が洛陽を占拠して逃げることができず、苦しい生活をしていたが、李叔霽の妻が車に乗って新しい夫と共に訪ねて来て、李叔霽と二人の子が避難の途中で賊に殺され、自分は幼い子らを連れて再婚したのだと言った。叔母は粗末な食事しか出せなかったが、李叔霽の妻が米や美味い食べ物を提供した。乾元中、粛宗が二京を奪回した後、叔母は揚州で李叔霽と再会し、姪が実は旅の途中でお産で死んでいたことを知り、賊に拐かされて、その妻となっていたのだと思い込んでいたのを恥じた。

呉郡の朱敖は、かつて陳留で賊将が「李叔霽の妻を手に入れた」と言っていたのを聞いた。

新繁県令　新繁の県令は、妻が死んで喪服を作るために雇った女工が美しかったので気に入り寵愛していた。数ヶ月後、女が「やがて夫が迎えに来て、遠くに連れてゆかれることになる」と言い、別れに際して県令は女から銀の杯をもらい、女に薄絹を送った。その後、退職して故郷に戻っていた県尉が新繁に残した亡妻の棺を持ち帰るためにやって来て県令に謁見したが、亡妻の棺に入れた銀の杯を県令が持っているので不審に思い、その理由を尋ねた。県令が顛末を話すと、県尉は棺を開き、妻の遺体が薄絹を抱いているのを見て、怒りのあまり薪を積んで遺体を焼いてしまった。

姚蕭品　杭州銭塘の姚蕭品は、自宅で宴会を開いていて頓死したが、すぐに生き返った。死んでいた間のことについて、県の役人に呼ばれて家を出ると、門前で捕まって船を牽かされ、逆らうと殴られたが、隙を見て逃げてきたのだと語った。

梁守威　肅宗の時、安史の党が世を乱す中、文武の才を自負していた長安の梁守威は、賊の支配地域である邢州の刺史の元に決起を促しに行こうとして、途中で同じく遊説の士と称する若者に出会った。若者は、肅宗が玄宗に無断で即位したことを不孝として非難し、肅宗には天下を太平に導けないので、邢州に向かうのは止め、混乱する長安周辺を安定させることに尽力するよう梁守威に諭した。青年は百人余りの兵を従えていたが、守威が拝謝して立ち去ろうとすると消えてしまい、そこにはおびただしい荒れ墓があった。

本巻は、玄宗の治世の後期において宰相として玄宗に仕え、後世に汚名を残した人物たちに関する説話が多く収録されているのが、際立った特徴である。

冥婚譚

「唐儉」（巻三二七　鬼十二）は、死んだ妾が男の鬼と浮気をしたのを生者である夫が怒る話であったが、「新繁県令」では亡妻が夫の上役相当の生者と通じていたという構図である。遺体を火葬に付すことが罰を意味していることを明確に示す説話である。

塚墓宿泊譚

「浚儀王氏」は、鬼同士が互いにどのように交流しているのかを具体的に描いた説話である。裴郎の岳母が新たに鬼となったので、その棺が変じた新居を一族が訪れ、歓迎の宴が行われていた場で裴郎は目覚めたのである。

変鬼帰還譚

「李叔霽」は、安史の乱の最中の出来事を描く。基本的には、鬼となった妻が男の鬼と再婚して叔母の元を訪ねたという話であるが、末尾に付された朱敖の聞いた話が正しければ、妻は死んでおらず、やはり掠われていた事になる。『太平広記』巻二七九「夢四」にも「李叔霽」という説話があり、それによれば李叔霽は大暦（７６６～７７９）の初めに卒している。

冥界召喚譚

「章仇兼瓊」は、役人の力関係によって、高官の身代わりに冥土に送られる官吏の悲哀を描く。

「姚蕭品」は冥界で苦役に就かされるという話であるが、地獄の刑罰としての苦役ではなく、現実にあり得た不条理な拉致と強制労働を反映しているものとなっている。

鬼神遭遇譚

「楊国忠」において、楊国忠を非難した女性は、太祖・太宗にゆかりのある女性の鬼と考えられる。

「梁守威」は、安史の乱の際に肅宗が太宗の禅譲を受けずに霊武で自ら即位したことを批判する立場から作られた説話である。

凶宅鬧鬼譚

陳希烈は、玄宗の寵臣から宰相になって李林甫や楊国忠に阿り、安史の乱が起きると安禄山に寝返って再び宰相となり、後に肅宗に自死を命じられた人物である。陳希烈の家に鬼が住み着くという怪事が起きたという「陳希烈」のような話が作られた背景には、陳希烈に対する批判意識があると考えられる。司直の季履済については、如何なる人物か未詳。

「李林甫」は、宰相李林甫の宅に、李林甫を恨みつつ死んだ者の鬼が復讐に訪れるという話である。名前を手に入れることによって相手を支配するというのは呪術においては一般的な事象であり、『西遊記』においても三蔵一行の行く手を阻む妖怪兄弟、金角・銀角が名を呼んで相手が

返事をすると中に吸収してしまう瓢箪「紫金紅葫蘆」を使っている（「第三十五回」）。本話には、冥事占判譚の側面もあり、李林甫の死の背後には無数の鬼の恨みがあったことが暗示されている。

まとめ

『太平広記』の鬼話は「巻三一六　鬼一」から「巻三五五　鬼四十」まで四十巻で構成されており、「巻三三五　鬼二十」は全体のちょうど中間の巻となるが、内容においても「鬼一」から「鬼二十」までが安史の乱まで、「鬼二十一」から「鬼四十」は安史の乱以後となる。

安史の乱の前後を分ける境界の巻である「巻三三五　鬼二十」で、安史の乱の原因となった政治の乱れを引き起こした宰相たちを扱うのは必然性があり、それらの説話の中で彼らが鬼を引き寄せるのも、その業の深さから言えば当然のことである。また、「趙佐」（巻三三四　鬼十九）で玄宗を、「梁守威」（巻三三五　鬼二十）では粛宗を批判し、「劉平」（巻三三二　鬼十七）では鬼に取り憑かれた安禄山を点描している。

安史の乱について、始皇帝をも含む様々な鬼が予兆を示していたことを、諸書から引用した説話を通して『太平広記』は示唆している。陰陽調和の崩壊する歴史の大きな節目において、跳梁跋扈する鬼を通して冥界から警告が発せられていたという主題を、配列された説話によって表現しているのである。

※　本稿は科学研究費基盤研究（C）研究課題「鬼文化・冥界表象からの日中比較説話文学史の構築」【研究課題番号：26370432】の研究成果の一部です。

注

（1）『日本女子大学大学院人間社会研究科紀要』第21号（２０１５）

（2）『日本女子大学紀要 人間社会学』第26号（２０１６）

（3）『太平広記』本文については、汪紹楹校点『太平広記』（中華書局　一九六一）に拠った。また各説話の解釈においては、木村秀海監修・堤保仁編『訳注 太平廣記 鬼部二』（やまと崑崙企画　二〇〇一）を参考とした。

The ghost stories of " Taiping Guangji" vol.16~vol.20

MITTA Akihiro

[Abstruct] "Taiping Guangji (Extensive Records of the Taiping Era)" is a collection of stories compiled under the editorship of Li Fang, first published in 978. The book is divided into 500 volumes and 40 volumes of them are ghost story parts. In this paper, I have analyzed vol.16~vol.20 of the ghost story parts.The results of the analysis, I have cleared ideological features and features on the story type of Tang dynasty ghost stories.